

大阪医科大学 一般・消化器外科学教室 専門教授就任のご挨拶

大阪医科大学 一般・消化器外科学教室 専門教授 田中 慶太郎



この度、令和2年5月1日付をもちまして大阪医科大学 一般・消化器外科学教室専門教授を拝命いたしました。

私は1991年(平成3年)に大阪医科大学を卒業し、同年より母校の一般・消化器外科学教室(岡島邦雄主任教授)に入局後、教室および関連施設で勉強させていただきました。腹腔鏡下大腸癌手術が世界で初めて報告されたのが私の入局年度と同じ1991年であり日本の報告は1992年でありましたが、当院の奥田準二特務教授らも1993年に腹腔鏡下大腸癌手術を開始されました。1997年には谷川允彦教授が就任され、私も2000年4月より奥田先生に指導いただき、専門的に腹腔鏡下大腸手術を開始しました。当時の腹腔鏡下大腸癌手術は、まだまだ黎明期とも言える時代ではありましたが、癌手術の原則を遵守しながら、腹腔鏡下手術の適応を次々と拡大して行く上司の方針に従いながら、患者に安全に低侵襲手術の恩恵を届けるべく試行錯誤を繰り返した結果、当院での腹腔鏡下大腸癌手術を希望される患者が急増してきました。2002年5月から2004年4月まで、フランス ストラスブール大学 (<https://www.ircad.fr> : Prof. Jacques Marescaux)に留学の機会をいただきました。当施設は1994年の開設以来現在に至るまで、低侵襲手術領域の世界の最先端施設に名前が上がる組織で、腹腔鏡下手術を中心とした低侵襲手術のトレーニングコース、アニマルラボ、所属研究所、インターネットテキストなどの多彩なプロジェクトを運営しています。同施設での経験は、間違いなく現在の治療に生きていますし、驚くべきことに当時の研究内容がまさに20年近くが経過した現在の低侵襲手術そのもの

となっています。つまり、ロボット支援下手術、摘出標本の自然孔摘出法(NOSE : natural orifice specimen extraction)、経肛門直腸間膜全切除(TaTME : transanal total mesorectal excision)など、まさに現在の新しい術式やアプローチとして注目される手技を当時のフランスで熱く議論していたことが印象に残っています。思い返しますと、肉体的にも精神的にも厳しい時期もありましたが、留学経験を挟んで下部グループスタッフと共に乗り越えてきた結果、開腹手術の時代にはなかった安全で質の高い最先端の低侵襲手術を本学で提供できるようになったことは何物にも代えがたい財産となっております。

2016年5月1日からは内山和久主任教授が病院長に着任されたことに伴い、一般・消化器外科学教室特別任命教員教授を拝命しました。このような機会をいただきましたことで、教室内に留まらず、他教室の先生方とも広く交流しご指導賜る機会が増加し、以前にも増して広い視野で教室の臨床、研究、教育に携わることができるようになったことには大変感謝しております。幸運にも今回は一般・消化器外科学教室専門教授を拝命しました。微力ではございますが、これまで勉強させていただきました専門知識を基に誠心誠意、後進の指導に努めたいと考えております。さらに、自身の専門性を追求して安全で確実な低侵襲手術を次世代に繋げることで教室および大阪医科大学の発展に努力を惜しまない所存であります。今後ともご指導ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。